

彫刻家 上床 利秋

## 世界で一つのブロンズ風鈴の制作

ブロンズでレリーフを制作する仕事は小型だったので、アトリエの講座生たちの風鈴作品も同時に铸込むイベントを企画してみた。

「世界に一つの自家製風鈴」は、その出来栄えに関係なく面白そう、日本の夏を感じさせるのがいい。その提案はすぐアトリエ講座の皆が同意した。

金属を「溶かして铸込む」という作業は古代ギリシャの時代から行われている。美術铸造は一点一点形が違うので、それらを金属で思いのままに復元できる技術を会得するには永年のキャリアが必要とされる。そのため日本では美術铸造職人は貴重であり、数は少ない。しかし、彫刻の本場イタリアでは有名な作家も自作を铸造すると聞くので「我もしてみむとて、するなり」と考えた。

粘土原型に比べてブロンズの仕事は①穴が開く。②铸型ヒビによるバリができる。③小さな気泡ができる。④思い通りに青銅が型に流れにくい。という難題があるが、実はこれが金属表現の魅力なのである。それは油絵におけるタッチや表情を活かす作業と同じであり、作家本人がやるから活かす意味がある。

現代は便利で軽い電動工具も発明された。最小限の修正を加えれば皆が喜ぶプレゼントの出来上がりだ。粘土で作った形を青銅を溶かして復元すると、作者自身も驚くほどの魅力的なオブジェに生まれ変わる。

彫刻の仕事はスポーツに例えるとトライアスロンのように難儀だ。しかしながら、出来上がった喜びはやはり格別だ。

風鈴の音を楽しむのは勿論のことだが、制作の過程を経験する喜びと達成感も、より多くの人々に体験して欲しいと思う。

2024年7月



稲満典子 作  
「キャンドルスタンド風鈴」  
偶然のおしゃれな穴から  
光が漏れる。

奥森日向子 作  
「金魚風鈴」  
金魚のしっぽが動く

吉元かつこ 作  
「ユリ風鈴」  
可愛い音色が響く

丸田多賀美 作  
「トラ風鈴」  
怠け者の虎が宙に浮く

宮千穂 作  
「ねじれ風鈴」  
磨いてピカピカに

